

私は走り続ける

がん、難病克服した大久保さん (茅野市出身)



あす9回目の
諏訪湖マラソン

生きる勇気伝えたい

生きる自信と勇気を伝えるために」。がんを克服し難病を乗り越えた市民ランナー、大久保淳一さん(49) 東京都港区 茅野市宮川出身が27日、第25回諏訪湖マラソンを走る。各地のマラソン大会に出場し、病から復帰した姿を見せて、同様に病で苦しい思いをしている人たちを励ましている。9回目の出場となる今回の諏訪湖マラソンは、病気前の自己記録へのチャレンジでもある。

(倉本敦)

大久保さんは2007年、ランニングでけがをして入院し、偶然に睾丸がんが見つかった。考えもしなかつたがんの告知から摘出手術、そして

病気と闘い、抗がん剤治療の激しい副作用とも闘った。

がんを克服した、という喜びの知らせもつかの間、合併症で生存率20%以下という難病「間質性肺炎」を併発した。

2度のがん手術、10カ月の入院と2年におよぶ闘病生活の結果、肺機能の3分の1、腹部のリンパ節が47個、右の睾丸を無くした上で、「筋肉

とスタミナを全て失った」。ト

イレに行くにも、四つんばいで20分かかるという毎日が待っていた。

「がんの告知を受けると、『人生のピークがこんなにも早く来た』心身共に充実して

2度のがん手術、10カ月の入院と2年におよぶ闘病生活の結果、肺機能の3分の1、腹部のリンパ節が47個、右の睾丸を無くした上で、「筋肉とスタミナを全て失った」。ト

イレに行くにも、四つんばいで20分かかるという毎日が待っていた。

「がんの告知を受けると、『人生のピークがこんなにも早く来た』心身共に充実して

2度のがん手術、10カ月の入院と2年におよぶ闘病生活の結果、肺機能の3分の1、腹部のリンパ節が47個、右の睾丸を無くした上で、「筋肉

とスタミナを全て失った」。ト

イレに行くにも、四つんばいで20分かかるという毎日が待っていた。

「がんの告知を受けると、『人生のピークがこんなにも早く来た』心身共に充実して

いた病気前の自分には戻れない」と、絶望します」と、同じ境遇の人々の心の奥底を代弁する。

ただ、今は「それは誤解です」と言い切る。

世界にはがんを克服して、なお国際舞台に戻る選手も多い。そして何より、入院中に読んだ、「乳がんを患った市民ランナーがランニング復帰」の記事に、一層の勇気をもらつた。「市民的で親近感を感じた。今度は、自分が勇氣を与える番だ」

退院後は、社会復帰を目指して走った。それから5年たつた昨年、フルマラソン

を完走。今年は100キロマラソンを完走するまで

復活した。「今、走ること

とは、神様がもう一度与えてくれた、人生のチャンスだと思っている。私がいうがん患者の挑戦」と話す。



がん治療で入院中の大久保さん(2007年夏、大久保さん提供)

目標は高い。その一つがフルマラソンを3時間以内で走ること。そして、病気前の自己記録の更新。「病気をして、さらに高みに上った」と言わざる、自分の姿を思い描いている。

サロマ湖100キロマラソンを走り抜いてゴールする大久保さん(2007年6月30日、大久保さん提供)